

佐渡国相川の庭園と作庭者

Garden and Gardener of Aikawa in Sado of the Edo Period

飛田 範夫

HIDA Norio

キーワード：佐渡、相川、庭園、作庭者、植栽

Keywords：Sado, Aikawa, Garden, Gardener, Planting

Aikawa prospered from the 17th century by mining of gold and silver. At first the garden of the Sado magistrate's office was built, and then the gardens of the licensed pleasure quarter, the temple, and the private house were made.

We can get to know about the gardeners in Aikawa of the Edo period from “The History of Aikawa of Sado(佐渡相川志)” written in 1753. Various people, such as a masterless samurai, a mountain priest, a local government official, and an exile, made the gardens.

“The History of Sado(佐渡志)” written in 1816, describes trees and flowers planted in the garden in Sado. Although many plants grew wild in Sado, there were also cultivated species carried from outside the island. Probably these plants were used for the gardens in Aikawa.

1. はじめに

佐渡市には江戸時代の庭園として、長谷寺（所在地：長谷）・妙宣寺（竹田）・国分寺（国分寺）・度津（わたつ）神社（羽茂（はもち）飯岡）・大乘寺（相川（あいかわ）下山之神町）・法然寺（相川下寺町）などが残っているが¹⁾、歴史的には佐渡の庭園はどのようなものだったのかを、江戸時代の相川について探してみたい。

相川で金銀山の採掘については、一説には慶長6年（1601）に鶴子（つるし）銀山の三人の山師が父（てて）の山の露頭を掘って多くの金銀を得たことから、六拾枚（ろくじゅうまい）・動遊（どうゆう）・割間歩（わりまぶ）が開発されるようになったといわれている。同年に徳川家康は金銀山を押さえるために佐渡を幕府領とし、統治のために敦賀（つるが）（福井県）の豪商だった田中清六を代官としている。

しかし、田中が金山経営に失敗したために、慶長8年に家康は代官頭だった大久保長安（ながやす）（1545～1613）を佐渡国奉行に任命した。長安は相川に港をつくり、慶長9年には鶴子銀山（佐和田町）にあった外山陣屋を廃して、港をのぞむ台地の先端の土地を500両で買い取り、新たに奉行所を建設した。佐渡国奉行の任務は金銀山の管理だけでなく、年貢米の収納や裁判決裁などの行政も含まれていた。

陣屋から銀山まで直線道路をつけて、その両側に味噌屋町・八百屋（やおや）町・四十物（あいのもの）町・米屋町・紙屋町など生活物資を売る町人の町を置いた。鉱山近くでは



図1 江戸時代の相川絵図（『図説新潟県の歴史』より）

諸国から来た山師・買石（精錬業者）が町を立て、海岸沿いには柴町・板町・炭屋町・材木町など資材を取り扱う店が建った〔図1〕。最盛期の相川の人口は4万人前後、寺院数は130カ所ほどだったという。しかし、寛永初年（1624）ころになると、金銀山は採掘量が減少して衰微していった。そのため相川は鉱山町というよりも、佐渡一国の政治の中心地になったことから、鉱山に近い上相川地区などにかわって下町が繁栄するようになった²⁾。

こうした相川の発展過程に沿って、各所に庭園が生まれているので、その状況を見ることにしたい。

2. 相川の奉行所の庭園

(1) 大久保長安の時代

『佐渡年代記』の慶長8年（1603）の項によると、当時佐渡の金山奉行だった大久保長安は、佐渡奉行所の普請担当役人の水田与左衛門に次のような指示を与えている。

うらのすゝみやへ越候所、女共居候所より参り候道に、ほそほそとらうか（廊下）をいたし、らうかつたひにありき候様に可_レ致候。らうかは上はかりふきて下はとひ石にて参候様可_レ致候。

奉行所の一画には長安の居住家屋が建てられ、裏側には涼み屋と呼ぶ離れが計画された。女性たちが居住する建物から廊下伝いに涼み屋に歩いて行けるように、廊下の屋根は仮葺きにして下には飛石を置くようにと長安は命じている。

だが長安の死後、生前に不正があったとして遺子たちが切腹を命じられた。『佐渡年代記』の元和（げんな）4年（1618）8月26日付けの史料には、

相川の陣屋は慶長九辰年大久保石見守（いわみのかみ）造立せしむる處。書院の結構制度に過る故、今年壊取。花島・築山の茶屋杯（など）をも取払ひ、此所をは後に至りて後藤座屋敷に被_レ下。

と述べられている。書院の建物や花島・築山（つきやま）がつくられていた茶屋は、贅沢すぎるとして破壊されてしまった。長安の裏の涼み屋というのは、この茶屋のことになるのだろう。茶屋が取り払われた場所は、佐渡で小判を造るために江戸の金座の後藤庄三郎が派遣されたことから、後藤が責任者となった金座・銀座などの屋敷として与えられた。

(2) その後の佐渡奉行所の庭園

大久保長安が弥十郎町に建てた佐渡奉行所は破壊され

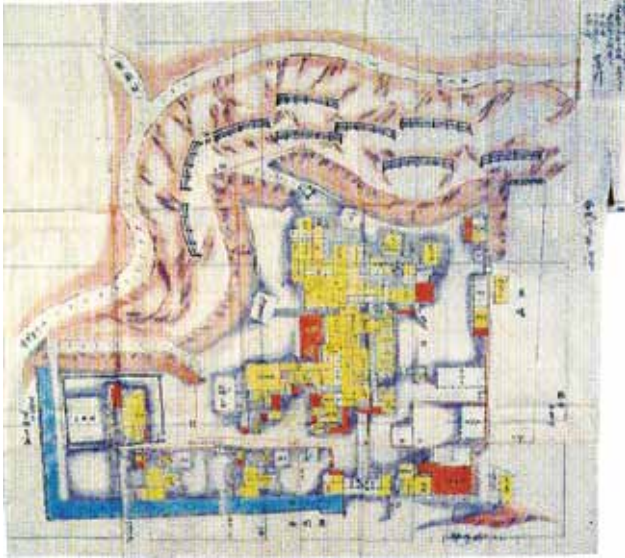


図2 安永6年(1859)の「佐渡奉行所絵図」
 (『図説新潟県の歴史』より)

て、その正面の広間町に新しい奉行所が建てられた。しかしその後、正保4年(1647)・寛延元年(1748)・安政5年(1858)に大火で全焼して、再建のたびに建物配置が変更されている。安政6年と書かれた「佐渡奉行所絵図」[図2]には³⁾、どこにも園池が描かれていないが、天保年間(1830～1844)頃とされる「佐渡奉行所絵図」[図3]には、左手(西側)の奉行役宅の南側に比較的大きな「池」があり、右手(東側)の一群の建築にも付属する「池」が2ヵ所記されている。

「御奉行所居間より相川海浜を望む図」と題された絵図[図4]も存在している。この絵図では園池の中央に土橋が架けられ、その後にマツなどの低木が植えられ、築山の背後には町が眺められるようになっている。だが、『図説佐渡島歴史散歩』の絵図の説明には、「幕末には異国船の防備で池を潰し、土塁を構築して守りを固めた」と書かれている⁴⁾。

佐渡一国の大規模な百姓一揆の事後処理のために、天保11年(1840)に佐渡奉行として赴任した川路聖謨(かわじとしかきら)(1801～1868)は、『島根のすさみ—佐渡在勤日記—』の同年7月24日の条で、次のように庭園の状況を述べている。

居間の庭は、二百坪も、其余もあるべし。北高く、南低くして、其東の方より南へかけ候て山かたちあり、さくら・松等数多(あまた)うえあり。はゞ三間余に、長さ二十間許(ばかり)の蓮池もありて、殊(こと)によろし。池魚(ちぎよ)多くみゆ。囲(かこい)の塀の上を見越して、相川の町並・大海みゆる。咏(ながめ)、殊によろし。

また、同年8月10日の条には、「御役所の蓮池に、誰が放ちけん、緋鯉一尾あり。其余は鮒(ふな)なり」と記している⁵⁾。

居間の庭園は200坪以上あって、土地は北から南へと傾斜していたらしい。東から南にかけては築山が設けられ、サクラやマツなどが数多く植えられていた。園池は幅が6mほどで、長さは40mほどもある広いもので、ハスが植えられ、ヒゴイ1尾とたくさんのフナが飼われていたよう

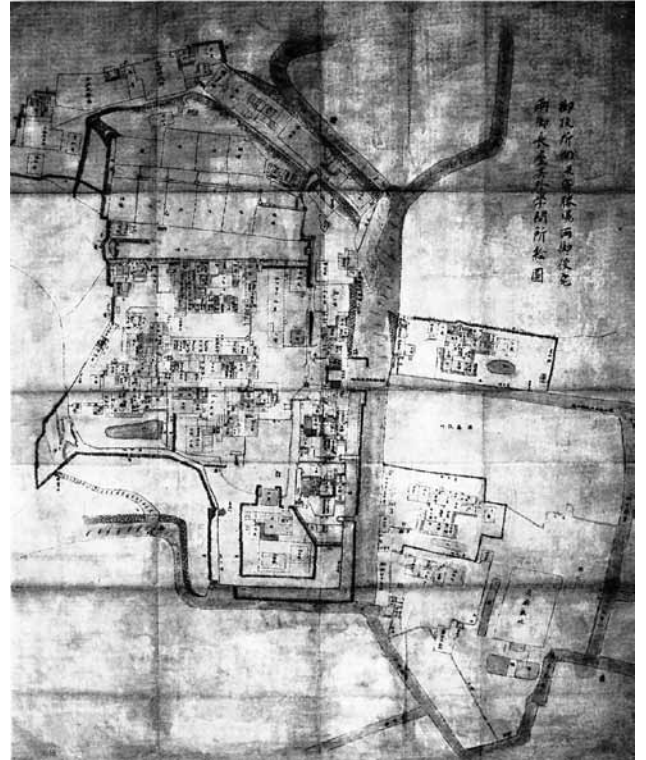


図3 天保年間(1830～1844)頃の「佐渡奉行所絵図」
 (『図説佐渡島歴史散歩』より)



図4 「御奉行所居間より相川海浜を望む図」
 (『図説佐渡島歴史散歩』より)

だ。庭園を囲う塀の上に相川の町並みと海が見えて、眺めはすばらしかったという。図4は川路の描写と一致しているので、川路の在勤していた期間(天保11年6月～翌12年5月)までは、図の園池は存在していたことになる。

奉行所跡の発掘調査によると、園池跡のヘドロの中から発見された唐津焼きの製作年代から、園池は奉行所が建設された当初か元和4年(1618)につくった可能性があると推定されている⁶⁾。大久保長安は涼み屋を建てただけでなく、園池も築いていた可能性もでてくる。

3. 相川の町屋の庭園

(1) 遊女屋の庭園

『島根のすさみ』の天保11年(1840)8月9日の条に、「彼の山大工(坑夫)に成りて、七年の寿(よわい)を保つものなし」とあるように、佐渡金銀山で働いていた労働者は坑道で粉塵を吸い込むために、肺をやられて短命だった。そ

のため給金が入れば酒を飲み、遊女屋で遊ぶのが彼らの気晴らしになっていた。江戸時代には相川に多くの寺が存在していたが、坑夫らの寄進で建てられた寺院があるのは、後生は幸せでありたいという彼らの願いからだった。

元和期(1615～1624)から寛永期(1624～1644)にかけて、佐渡の金銀山はかつてない繁栄を迎えている。「相川町々書上」(年月日不詳)の「水金町(みずかねまち)」の項によると、元和の頃までに相川には遊女屋が30軒あまりもでき、それぞれが30～40人の遊女をかかえたために、総人数は1200人にのぼったという。遊郭は2カ所にわかれていて、鉾山稼業の人びとを客としたのが山先町(やまさきまち)で、廻船商人たちによって栄えた港の廓(くるわ)が小六町(ころくまち)だった⁷⁾。

寛永21年(正保元、1644)4月付けの「相川町雇役納帳」には、山先町で雇われていた女42人の名前と14人の雇い主の名前が書かれている⁸⁾。「伏見・左馬介・石州・長門・吉野・日向」などの名前からすると、女たちは皆遊女ということになる。雇い主として「加賀 平兵衛、越後 加左衛門、三河 重右衛門、伊勢 三郎右衛門、大坂 庄右衛門」というように出身地をつけた名前が並んでいるので、全国各地から商売して儲けようと人びとが押しかけていたことがわかる。

小六町については雇い主が1人、女が10人書かれているが、後半は失われているために詳しいことはわからない。前掲の「相川町々書上」には、「相川町ノ遊女屋町、慶長年中(1596～1615)小六町ニ始ル」とある。下寺町の「石坂」項には、小六町の道伝という者が伊勢詣でを果たせなかったことから、使おうと思っていた金で下町通りから寺町の高台に登る石段を築いたと書かれている。明暦(1655～1658)の頃まで幅三尺だったものを広げたことと、道伝が石坂を築いたのは明暦後だったことになる。

同書上は続けて、

此者小六町西側ニ居ス、遊女ヲ多ク抱ヘ置ク、家作り宜(よろ)シ、庭ニ泉水・築山ノ形、天和(てんな)・貞享(じょうきょう)ノ頃迄アリケルトナン。

と述べている。道伝が建てた小六町の遊女屋は、建物はみごとなもの、池や築山を持つ庭園もあったという。この庭園は天和・貞享の頃(1681～1688)まで残っていたらしい。

『佐渡古実略記』には同様のことが、「屋敷の内、内座敷も数多くあり、坪は大きな山を築き、泉水を穿(うが)ち、これに橋をかけ、向うに茶屋を立つ」とやや詳しく述べられているので、庭園は建物に囲まれた坪庭だったことがわかる⁹⁾。坪庭は明かりや風を取り入れる効果があることから設けられたものだが、ここに大きな築山をつくり、池を掘って橋を架けていたという。奥には茶室も建てられていたようだ。

山先町にあった遊女町は、奉行所に近くて風紀上よくないという理由から、享保2年(1717)には町の北端の水金町に移転させられている。遊女屋11軒と遊女30人が総坪数1186坪の土地に移っているのだから、一軒あたりの敷地面積からすると庭園もつくられていただろう。元治(げんじ)元年(1864)の水金町の宗門帳には、夷屋・平野屋・海老屋・大黒屋・坂本屋・蔦屋(つたや)・松坂屋・板橋屋・

東屋・松本屋・桑名屋の11軒の遊女屋と、遊女44人の名前が記されている¹⁰⁾。川路聖謨の『鳥根のすさみ』の天保11年(1840)9月8日の条には、「水金町という所の御免遊女町へ行き、一朱にては、江戸の一両ほどの遊びに准ずるといふ、家来に世話のやけ候も尤(もっと)も也」と、安価で遊びやすかったことが書かれている。

(2) その他の庭園

しかし、寛永11年(1634)と同13年の洪水で坑道の多くが水没して、鉾山は没落してしまう。元禄期(1688～1704)になって、佐渡奉行萩原重秀(おぎわらしげひで)が金銀山の再生のために、25万両を投じて南沢大水貫(おおみずぬき)を掘ったことで、金銀山は再び活況を呈した¹¹⁾。

この頃の庭園のことについては、「相川町々書上」の中寺町の「実相院坂」の項に、「此坂口ノ左ニ享保ノ頃後藤高田与右衛門下屋敷アリ、作事奇麗(きれい)ナリ、泉水山掛り景色宜(よろ)シ」と記されている。享保年間(1716～1736)には後藤配下の高田与右衛門の下屋敷(別荘)に、みごとな建物と園池がつくられていたらしい。

これもやはり18世紀前半のことだろうか、同書上の中寺町の「大沢」の項には、「善行寺前、羽口屋長兵衛屋敷ニ躑躅アリ、花ノ頃ハ見ル人多シ」と書かれている。「羽口」というのは鍛冶場の吹床で使う粘土製のもので、これを製造販売していたのが羽口屋ということになる。長兵衛の屋敷の庭にはツツジが数多く植えられていて、花時には多くの人びとが見に訪れたというから、さまざまな種類のツツジが植えられていたのだろう。

下相川村の平については、「農家ノ外(ほか)ニ羽田覚左衛門・高島孫七屋敷アリ、花ノ頃人多ク遊散ス」と書かれている。羽田覚左衛門と高島孫七は、「農家ノ外」のあるので農民ではなかったことになる。「花」はサクラを意味するから、散策できるほどの広い敷地だったのだろう。

4. 相川の「庭造」たち

(1) 『佐渡相川志』の記述

庭園をつくっていた人びとのことを、江戸時代には「庭造[作]り」と呼んでいた。江戸幕府の官職については、『武鑑』では「御庭造[作]り」と書かれている。庭園の設計・施工管理が担当だった。『難波(なにわ)雀』(延宝7年[1679])の「諸芸師」の項と、『京羽二重(はぶたえ)(6)』(貞享2年[1685])の「諸師諸芸」の項にも「庭作」と記されているから、大坂・京都でも同様だったと考えられる。大坂では庭木を販売する者たちを、「植木屋」と呼んで区別しているが、次第に植木屋たちも庭園もつくるようになって、「庭作」という職種はなくなっていったようだ¹²⁾。

佐渡市相川町の永弘寺(現、永宮寺)の第12世松堂(1695～1772)が著した『佐渡相川志』(宝暦3年[1753]頃)には、「二十五、庭造」の項に次のようにあり、佐渡でも庭園をつくっていた人びとを「庭造」と呼んでいたことがわかる。

ト心	寛永年中ニ来ル。何レノ所ノ者ト言フ事ヲ知ラズ。尊見流ノ庭達ナリ。下寺町本典寺、南沢妙円寺ノ庭ト心ガ築ク所也。
窪田松溪	柴町ニ住ス。享保二酉年九月十二日ニ死去。



写真1 ト心がつくった妙円寺庭園 (2002年撮影)



写真2 小倉大納言実起がつくった観音寺庭園 (2002年撮影)

伊藤久兵衛 米屋町ニ住ス。天野一角ノ門人。
 薬屋権兵衛 河原田ノ住人。
 天野一角 無人ト言フ浪人ナリ。
 宝寿院 西方村修験(しゅげん)也。
 宇佐美忠左衛門 由朝地役人
 伊藤権兵衛 八百屋町ニ住ス。久兵衛弟子。
 勝見幸七 四十物町ニ住ス。当時ノ人也。
 小倉大納言実興卿、当国ニ左遷ノ間御慰(なぐさ)ミニ、
 鹿伏村観音寺ノ庭、河原田河崎屋庄左衛門庭、御築キ
 成サレシ也。今依然トシテ存ス。

江戸時代の江戸・大阪・京都という大都市に庭園をつくる専門家が存在していたのは、財力のある階級が多かったためと理解できるのだが、佐渡にこれほど多くの「庭造」がいたことは奇妙な感じがする。佐渡の「庭造」はどのような人びとだったのかを見てみよう。

(2) 「庭造」たち

1) ト心(はくしん)

ト心は寛永年中(1624～1644)に来島しているので、かなり早い時期に活躍した人物だったことになる。「尊見流」の達人だったというのだが、来歴は判然としない。村上市神林の忠家にも、「洛陽五条通 永嶋流 庭極齋述」と書かれた序文を持つ『永嶋流庭伝 秘書』というものが伝わっている¹³⁾。『築山洗指録』(寛政9年[1797])に「山師家各自ニ所得ノ伝ヲ称シテ流儀云々ト云フ」と指摘されているように、当時の作庭家たちは勝手に「何々流」と称していたにすぎず、それほど明確な技法上の違いが存在したわけではない。

現在も南沢(現、相川下寺町)妙円寺の本堂裏の山裾には、護岸石組を持つ南北5m、東西2～3mほどの園池が残っている[写真1]。後方には立石も見られるが、園池の排水口は改造されてコンクリートになっている。下寺町(現、相川下寺町)本典寺(ほんでんじ)には長辺7m、短辺4～7mほどの園池があるが、荒廃している。護岸には小ぶりの石を使っていることからすると、妙円寺と同一作者のようには見えない。

2) 小倉大納言実起

『佐渡相川志』では「小倉大納言実興(さねおき)」となっているが、『佐渡名勝志』(延享元年[1744])では「小倉大納言実起」と書かれているように、「実興」ではなく実

起と書くのが正しい。霊元天皇と実起の娘の子である一の宮に皇位を継がせようと画策したが、失敗して出廷を拒否したことから、実起は息子とともに延宝9年(天和(てんな)元、1681)11月に佐渡に流刑にされている。貞享元年(1684)3月に62歳で亡くなっているの、3年たらずの滞在だったことになる。

公儀から五人扶持をもらい最初は羽田町(現、相川羽田町)に住んだが、のちに商人岩佐脩省(しゅうせい)(嘉右衛門)の鹿伏(かぶせ)村(現、相川鹿伏)の別荘に移っている。遺言に従って葬られた場所が鹿伏村の観音寺(真言宗、慶長13年[1608]再建)だったから¹⁴⁾、ここでの作庭の可能性は高い。当初のものかどうか確証はないが、観音寺の本堂と庫裏の間の間口5m、奥行き8mほどの中庭には、背後に築山を持つ、護岸石で囲まれた小さな池が残っている[写真2]。実起がこの庭園をつくった時に、相川に住む医者で書家だった横地玄常に依頼して、「街山(げんざん)」という横額を書いてもらっている。「すぐれた山」という意味らしいので、池と築山をほめたものと考えられる¹⁵⁾。

実起は文人肌で儒学・漢詩・書道などにすぐれていたことから、天和3年(1683)9月には、歌会に参加していた河原田(現、河原田本町)の商人中山新左衛門の邸宅に、逗留して半月ほどすごしているので、同所の商人河崎屋庄左衛門の庭園をつくった可能性は考えられる。ところが、『定本・佐渡流人史』はこの中山家の庭園のほか、金井町中興(なかおき)(現、中興)の西蓮寺、平清水の毘沙門堂、吉井本郷の関根家、真野町吉岡(現、吉岡)の渡部家など「十指に余る」作庭を行なったとしている。『新潟県の庭園』は、吉岡の渡部氏小倉園と真野町竹田(現、竹田)の若林氏庭園について、実起の作という言い伝えがあるとする¹⁶⁾。3年たらずの滞在期間にこれだけの作庭ができるものだろうか。

実起のような流人(るにん)と呼ばれた重罪犯は、元禄13年(1700)以降は伊豆や隠岐島(おきのしま)へ流されるようになって、佐渡には送られて来なくなった。幕末になって始まった無宿者の佐渡への島送りは、軽犯罪者などを失業者救済として鉾山で働かせるものだったという¹⁷⁾。

3) 天野一角

天野一角については『佐渡相川志』の「十四、馬」の項に、「大坪流 天野一角 後(のち)無人ト改名。元禄年中ニ来ル。

高田浪人ナリ」とあるので、高田藩（新潟県上越市）に仕えていたが、元禄年中（1688～1704）に佐渡に渡ってきたことがわかる。高田藩主だった松平光長は、継嗣（けいし）問題にからんだ騒動のために、天和元年（1681）に改易となっている。高田藩に仕えていた馬術の達人が浪人となったのは、このお家騒動が原因ではないだろうか。趣味をいかして庭園作りを始めたが、次第に弟子を持つほどの専門家になったということなのだろう。

4) 窪田松溪

窪田松溪は享保2年（1717）に没していることからすると、天野一角と同年代くらいに活躍していた人物らしい。

5) 伊藤久兵衛と伊藤権兵衛

『佐渡相川志』に「伊藤久兵衛 [略] 天野一角ノ門人」「伊藤権兵衛 [略] 久兵衛弟子」とあるので、天野一角から伊藤久兵衛へ、久兵衛から伊藤権兵衛へという作庭技術の伝授があったことがわかる。久兵衛と権兵衛はともに伊藤という同姓であることからすると親族で、浪人だった天野一角と関連を持ったのは、二人とも浪人だったからではないだろうか。

6) 宇佐美忠左衛門

宇佐美忠左衛門は「由朝地役人」とされている。地役人というのは佐渡奉行が佐渡国の統治のために、現地で召し抱かえた下級役人のことを意味している。『佐渡一国天領』には「地役人」の項があって詳しく調べられていて¹⁸⁾、「学問・武芸にすぐれていた地役人の一覧」の中に、「宇佐美忠右衛門 [役職] 米蔵定役、[退任年] 享保十九、[特技] 剣術・庭造、[備考] 東軍流・慶々流」とまとめられている。草書体だと「右」と「左」はよく間違われるので、宇佐美忠左衛門のことと見ていい。忠左衛門は由朝で米蔵の出納をつかさどっていた役人らしい。退任年が享保19年(1734)になっているから、この前後に作庭に関わっていたのだろう。

7) 勝見幸七

『佐渡相川志』の「三十三、塗師」の項には、「勝見幸七四十物町ニ居ス。当時存」と記載されている。おそらくこれが彼の本業で、絵が巧みなことから作庭のための下絵を描いていたのではないだろうか。「当時」とは現在という意味なので、『佐渡相川志』が書かれた宝暦3年（1753）頃に活躍していたということになる。

8) その他の人物

『佐渡相川志』に挙げられている「薬屋権兵衛」はおそらく呼び名からすると本来は薬屋で、「宝寿院」は修験者だったというように、それぞれが本業を持っていたようだ。

5. 佐渡の庭園の植物

相川の庭園にはどのような樹木や草花が植えられているのだろうか。田中美清編『佐渡志』（文化年中 [1804～1818]）の中の「草類」「木類」の中から¹⁹⁾、佐渡の民家で植えていたものを挙げると表1のようになる。植物名で「和名」とあるのは古語に近いもので、佐渡での呼称と考えられる「方言」とされているものは、現在の標準和名とほぼ同じになっている。合歡（ネムノキ）を「かうかの木」、柞木（ツゲ）を「びんかか」といっているのが特殊なくらいで、江戸時代後期の佐渡での植物の呼び名は、現在とあまり変わらなかったように見える。

表1 佐渡の庭園植物（『佐渡志』より）

漢名	説明
[草類]	
桔梗	数種あり。花或は紫に、或は白単なるあり、複なるあり。北山の下に生ずるもの、紫の一重にして薬となすに佳也と云ふ。羽茂郡小木村に越ゆる路の傍に多くあり。花の盛なる殊に観つへし。
白及	方言 [しらむ]。人家に栽ゑて花を翫ふ。
水仙	人家に栽ゑて花を弄ぶもの多し。
百両金	方言 [たちばな]。
殊砂金	方言 [まんりやう]。 此二種昔はなかりしが、今雑太郡新保村のあたりに多し。本南国の産にて、甚だ雪霜を恐ると云へり。
芍薬	人家園中に栽ゑて花を賞す。薬用にするもの多くは、加茂郡長江村に産する山芍薬を用ふ。
牡丹	園中に栽ゑて花を賞す。薬種とするに足り難し。
萩	方言 [はぎ]。原野に数品あり。方言みやぎのと称するもの紫花美はし。又よめはぎは見るに足らざるものなり。
菊	数種あり。或は園中に栽ゑて花を賞し、或は圃に栽ゑて食用とす。食用もつとも愛すべし。
鶏冠	方言 [けいとうげ]。圃に栽ゑて花を愛す。
芭蕉	方言 [ばせを]。人家に栽ゆれとも、元来南邦の産なる故、寒国に移しては繁茂し難し。故に甚だ稀なり。
木賊	方言 [とくさ]。山谷水辺に多し。庭除に栽るもあり。西三川砂金山の産は、岐より枝を生ず。名産とするものなり。
紫菀	民家に栽ゑて繁茂しやすし。
麦門冬	和名 [やますけ]、方言 [やぶらん]。多く人家の軒下・雨落に栽ゆ。大小葉の二種あり。
葵	方言 [ふゆあふひ]。園中に栽ゆ。食用にあらず。
蜀葵	方言 [花あふひ]。錦葵は方言こあふひ、又、せにあふひ有り。黄蜀葵は方言ひまはり、又、秋葉あり。ともに圃園に栽ゑて花を賞す。
敗醬	方言 [おみなへし、又ちどめぐさ]。
迎春花	方言 [わうばい]。盆栽となして花を愛するものあり。山野に自生なし。
石竹	一名 [瞿麦]、和名 [なでしこ]。花を賞するもの数品あり。
剪春羅	方言 [せむのうげ]。(現、センノウ)
剪夏羅	方言 [かむひ]。(現、ガンピ)
鉄線	方言 [かつら]。(現、テッセン)
虎耳草	方言 [ゆきのした]。
金盞草	方言 [きむせんか]。 以上五種、花壇に栽ゑて人の賞するもの也。
風仙	人家に種て花を翫ふ。花色品多し。(ホウセンカ?)
躑躅	和名 [つゝぢ]。山中に有り。加茂郡鷲岬村弾野には殊に多く、紅花あり、白花あり、黄花も又稀にあり。其さつき、きりしま、又琉球つゝぢの類多ければ省きつ。一種北山の南の崎に奇木あり。樹葉共につゝぢにして桃花を着く。草木の諸書において見る所なし。天の物を生ずる其測るべからざる事、斯の如し。
牽牛子	方言 [あさがほ]。花数品あり。花園に栽ゑて愛するもの多し。

月季花	方言 [ちやうしゆん]。花を愛するもの、花壇に栽ゆれども刺多し。
南天蜀	通名 [なんてん]。人家に栽ゆること多し。
藤	和名 [ふぢ]。紫藤を以て本色となす。花を賞する人、白藤を愛するもあり。(以下略)
菖蒲	端午に軒に挿むもの是也。一種花菖蒲あり、賞するに足らず。又石菖蒲あり。山谿水谷の間にあり。
葡萄	古名 [るびかづら]、方言 [ぶどう]。所々園中に栽ゆ。
蓮藕	和名 [はちす]。天竺蓮と云ふものは花形大にして、白色弁辺一分許り深紅色。是を秘伝花鑑に錦蓮と云ふ。又尋常の花より小さくして、茎上に二三四五花簇り開き、千弁にして内に房なきもの和州当麻寺より出づ。(以下略)
[木類]	
桜	通名 [さくら]。数品あり。羽茂郡には八重菊の花に似たるものあり。土人深く珍とす。他に移せば枯るゝと云ふ。
李	和名 [すもゝ]。多く有り。青皮李は稀也。俗に青すもゝと云ふ、もちすもゝと云ふもの味勝れり。
梅	和名 [うめ]。此国早梅なし。正月花を着くるものを早しとす。雪多ければなるべし。多くは二月半を過ぎて紅なるも白きも一般に開くなり。只、内外海部にはたえて生育し難し。直脚梅あり、緑萼梅あり、品字梅の類なるべし。さろんと云ふもの多し。鴛鴦梅にして、八つふさと云ふものあり。品類多くして記するにいとまあらず。
桃	和名 [もゝ]。紅あり、白あり、紅白交れるあり、緋花あり。沢根村の桃莊荒廢して、後は其品半を減ぜり。
棗	和名 [なつめ]。家園に植ゆ。核大に肉少くして下品也。
梨	和名 [なし]。家園又は圃中に栽ゆ。水梨あり、青梨あり。松尾、狐ころしは俗間の方言なるべし。
海紅	通名 [かいとう]。所々園中にあり。垂糸海棠は稀也。
檳榔	方言 [くはりん]。(現、カリン)
楡	方言 [まるめる]。(現、マルメロ)
	二種とも家園に栽ゆれども、相混じて詳かならず。
林檎	方言 [りんご]。州の東南に多し。加茂郡夷湊より舟に積て、買去る也。
柿	和名 [かき]。所々に多くあり。品類も亦甚だ多し。就中、栗の江と名付くるもの殊に多し。栗の江村より出れば也。(以下略)
安石榴	[ざくろ]。此地にあるは、花一重にして淡紅なるものなり。多く実を結ぶなり。八重の花、又黄白なるは見る事なし。
柑	和名 [かぐのみ]、方言 [みかん]。元より南国の物なれば、此地には稀也。只、羽茂本郷の内に栽えて繁茂する也。然れども皮厚く、酸味多くして下品也。形も亦小し。此外橘柑の類事を好むもの、他邦より移し栽ゆと雖ども、多くは育し難し。只香橙あるのみ。
柚	和名 [ゆ]、方言 [ゆず]。三郡ともにあり。海辺村々には見るに少し。
枇杷	和名 [びは]。三郡ともにあり。国仲と云ふあたり、最も多し。
銀杏	和名 [ちゝのき]、方言 [いちやう、実をぎんなんと云ふ]。樹に雌雄あり。実を結ぶもの、大野村のあたりに多し。

榲	[かや]。三郡とも山中にあり。種類も又少からず。羽茂郡徳和村には殊に多し。以て碁盤村に作るべし。実は同村東光院の境内に出づるものを名産とす。
無花果	[いちじく]。小木也。家園に植えて熟するを採りて、痢病の薬とす。(以下略)
山茱萸	方言 [ぐみ]。薬園に植ゆ。一種なかしろぐみあり。秋ぐみなり。
松	黒赤の両種あり。羽茂郡新倉山より出づるもの、文理常に異なり。材に用ゆるには、栗野江村より出づるもの佳なり。三針なるもの、四針なるもの、稀に有るを見る。皆な好める人、他の国より移したるなり。
柏	扁柏側柏とも。昔は此国になかりしなり。今あるものは皆近き世に、他の国より移し栽えたるものなり。びやくしんは国仲と云ふあたりにあり。通雅に所謂刺柏成るべし。八幡村辺に生籬にするものは、ひやくしんにて漢名矮檜と云ふものによ。檜はいづれの村にもあり。中海部と云ふあたりの山中に殊に多し。いふきと云ふものは、通雅の二色檜にあたと云ふ。爰にあるものは、多く這ひふきと云ふもの也。
杉	赤白の両種あり。赤を尚ぶなり。羽茂郡川茂村、加茂郡羽黒村より出づるもの、大船の檣に作るべし。神代杉と云ふもの、物理不識の老杉也。真更川村山居の池、其外国中の深田より出づる也。器に作るに色淡黒にして愛すべし。
木蘭	方言 [もくれんげ]。唐土には花の白きあり、黄なるありと云ふ。此国にあるは紫のみなり。
辛夷	和名 [やまあらゝぎ]、方言 [こぶし]。山野に生ず。此国にあるものは花白くして、淡紅の条あるなり。紫こぶしと云ふは、未だ見ず。
楠	方言 [ゆずりは]。深山に多し。
樟	和名 [くすのき]。甚稀也。一種枸樟は山中の小木なり。方言くろもんじと云ふ。
柯樹	方言 [しいのき]。山中に多し、大木也。加茂郡水津村の辺殊に多し。潤葉なるもの、大葉なるものあり。実は榲の実より小さし。小兒炒り食するに味ひ良なり。同郡椎泊村より出づるものを名産とす。
槐	方言 [ゑんじゆ]。此国に産する所はかはらゑんじゆ也。又山中自生にがますみあり、莢莢也。秋月、実を結ぶ。南天燭の実より、大に観つべきものなり。山家の小兒熟するを待て、採り食ふ。
合歡	和名 [ねぶ]、方言 [かうかの木]。山野自生多し。高さ二三尺に繁茂す。(現、ネムノキ)
柳	数品あり。葉となすものは檉柳のみ。冬葉落つる事草の如し。(以下略)
都李	方言 [こうめ]。庭上に多く植ゆ、小木也。白花、紅実、観つべし、食ふべし。
冬青	方言 [もちの木]。大木あり。又女貞は世にねづみもちと云ふ。さかき葉に似たり。
枸杞	通名 [くこ]。刺多きを以て籬とす。又五加あり。和名うごぎ、方言にはねづみさしと云ふ。
石楠	方言 [しやくなげ]。深山に生ず。金北山に登る人、折来て証とす。
紫荊	方言 [はなすわう、又つるむらさきと云ふ]。庭上に植ゆるものなり。
木槿	方言 [むくげ]。多く籬に植ゆ。

柞木	方言 [びんかゝ]。山中に生ずる小木也。又庭上に植ゆるもの黄楊木あり。方言ひめつげと云ふ。土人採りて印材とす。(現、ツゲ)
山茶	初冬開くもの、方言さゞんかと云ふ。紅白二種あり。又俗にいふつばきをも山茶と云へり。つばきは早晚の時候によらず。花数百種あり。小野蘭山翁記せし所の二十四種、土人井筒屋半次郎記せし所の二十八種あり。(以下略)

植物の種類をみると、葉・野菜・果実・木材などに利用されていたものが選ばれている。桔梗は道端の草のように述べられているが、「花の盛なる殊(こと)に観(み)つへし」とあり、現代でも庭園に植えられるものなので入れておいた。また、木類の柿・枇杷などは果樹園に植え、榎(かや)・杉などは山中にあると説明されているが、人家の周囲に植えた場合もあったらうから表に含めた。

芍薬は本来薬草だったが、「人家園中に栽えて花を賞す」と説明されているように、花が美しいことから観賞用に民家でも植えるようになってきている。菊については「園中に栽えて花を賞し、或は圃に栽えて食用とす」とあるように、観賞用と食用にわかれている。菊を観賞用に植えている「園」は庭園、食用に植えている「圃」は畑を指している。枸杞(くこ)や木槿(むくげ)を生垣に使うのは珍しいことだが、古い風習を伝えているのだらう。

芭蕉は「元来南邦の産なる故、寒国に移しては繁茂し難し」と書かれているように、本来佐渡にはなかったが、観賞用に植えるようになってきている。月季花(ちょうしゅん)はチョウシュンバラのことなので、外来種ということになる。百両金(たちばな)と殊砂金(まんりょう)も「此二種昔はなかりしが」とあるように、やはり佐渡には存在しなかったが、江戸時代に投機の対象にまでなって全国的に流行したこと、渡って来ている。松については、「三針なるもの、四針なるもの、稀に有るを見る。皆な好める人、他の国より移したるなり」と記されているから、佐渡にも園芸好きが多かったようだ。

この表からは省いたが、「やしほ」と呼ばれていた椰子(やし)は、「此国の産にはあらず。唐土・嶺南の国々より出づるもの、流れ来るを海浜の民拾ひ得るなり」と書かれているので、実が黒潮に乗って南国から佐渡の海岸に流れ着いていたことがわかる。

野山に自生する草花・樹木だけでなく、佐渡には全国的に流行していた植物が渡って来ている。江戸時代前期・中期に相川にやって来た人びとも、菊・躑躅・山茶(さざんか)などの園芸品種を持ち込んでいたのではないだろうか。

6. 結論

江戸時代前期・中期(17・18世紀)に、金山の稼働で繁栄していた佐渡では、武家・商人の本邸や別荘、あるいは遊郭などさまざまな建物が建てられ、それに伴って庭園がつくられていた。『佐渡相川志』の記事に寺での作庭例が挙げられているのは、相川が鉱山都市として栄えたことから、武家や商人だけでなく坑夫などからの寄進によって、寺院が盛んに建立されたことによると考えられる。

庭園をつくるのを指揮した人々は、浪人・絵師・修験者・地元の役人・流島の公家などさまざまで、本来作庭を専門

とする人間ばかりではなかった。金山で相川の町が繁栄したことから作庭する人物が求められて、他の分野の人びとも庭づくりに関わるようになり、専門化していったということなのだろう。

江戸後期(19世紀)に佐渡の庭園に植えられていた植物については、『佐渡志』の史料から知ることができる。園芸植物ばかりでなく、薬用・食料・木材などに使用される有用植物が、花が美しかったり樹形がよかったりしたことから、民家の庭園にかなり植栽されていたことがわかる。相川の江戸前期・中期の庭園にも、こうした植物が選ばれて植えられていたと推測される。

【注】

- 1) 京都林泉協会編・著『日本庭園鑑賞便覧』学芸出版社 2002年、p.132
- 2) 小林式編『図説新潟県の歴史』河出書房新社、1998年 田中圭一・他編『新潟県の歴史』山川出版社、1998年 相川町編・発行『佐渡相川の歴史(資料集7)』1978年、p.290-291
- 3) 前掲『図説新潟県の歴史』p.149
- 4) 佐藤俊策「発掘・佐渡奉行所」『図説佐渡島歴史散歩』河出書房新社、1998年、p.62-66
- 5) 川路聖謨著・川田貞夫校注『島根のすさみ—佐渡在勤日記一』平凡社(東洋文庫)、1973年 磯部欣三『幕末の佐渡日記』恒文社、2000年、p.81-84
- 6) 佐藤俊策「佐渡奉行所跡」『金銀山史の研究』高志書院、2000年、p.53-57
- 7) 新潟県編・発行『新潟県史(資料編9)』、1981年、p.451-474
- 8) 前掲『新潟県史(資料編9)』p.375・376
- 9) 磯部欣三『佐渡金山』中央公論社、2001年 p.239-241
- 10) 前掲『佐渡金山』p.242-244
- 11) 前掲『新潟県の歴史』p.157・158
- 12) 飛田範夫『大坂の庭園』京都大学学術出版会、2012年、p.3・4
- 13) 新潟県教育委員会編・発行『新潟県の庭園(下越・佐渡地区)』1988年度、p.42・43
- 14) 山本仁・本間寅雄監修『定本・佐渡流人史』郷土出版社、1996年、p.249-257
- 15) 前掲『佐渡金山』p.333
- 16) 前掲『新潟県の庭園』p.62・63
- 17) 前掲『佐渡金山』p.312
- 18) 相川町編・発行『佐渡一國天領—佐渡相川の歴史(資料集7)』、1978年、p.91-143
- 19) 『越佐叢書(第7巻)』野島出版、1975年、p.78-118

【付記】

長岡で集めておいた資料を使って、兵庫県明石での釣りの合間に、日本造園学会関東支部大会に2002年に発表した「佐渡・相川の「庭造」たち」という小論に、佐渡奉行所・町屋の庭園と佐渡の庭園の植物の項を付け加えて、この論文を作成した。